HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サハリン州ロシア極東地方の地域史研究について : 小史および現状と背景
Author(s)	ワシリェフスキー, アレクサンダー A; ヴィソコフ, ミカエル S
Citation	高等教育ジャーナル, 9, 156-164
Issue Date	2001
DOI	10.14943/J.HighEdu.9.156
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29687
Type	bulletin (article)
File Information	9_P156-164.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サハリン州ロシア極東地方の地域史研究について

―小史および現状と背景―

アレクサンダー A. ワシリェフスキー，ミカエル Ｓ . ヴィソコフ

国立サハリン総合大学

Study of Local History in Sakhalin Region, Far East of Russia.

(Brief history, current situation and perspectives)

Vasilevski Alexander A. and Vysokov Michael S.

Sakhalin State University

（翻訳版）

（要約）この論文の目的は，サハリンと千島列島の島嶼地域に関する地域研究の現状と背景を明らかにし，評価することである。先ず，19 - 20 世紀におけるサハリンと千島列島の歴史科学の発展を簡単に説明したあと，歴史研究のための機関，歴史学者，歴史学者の会議などについて詳しく記述する。次いで，著者らは，この地域の歴史についての新しい概念を提案する。この地域の歴史はきわめて複雑であり，整合性がなく，ほとんど混乱している。なぜそうかと言えば，第一に，島嶼の歴史を書くための資料がきちんと精査されていないためだとされていた。第二に，サハリン島も千島列島もロシア帝国（とその継承国であるソビエト連邦），今のロシア，と日本との鋭い領土争いの対象であったからである。この関係で，ロシア（ソビエト）と日本の研究者はいずれも，島嶼の歴史を適切に研究する代わりに，自身の政府の議論に都合の良い材料を探していた。しかし，このように名付けられた島々の歴史は，数世紀にわたって相対峙する２つの国の歴史のみでは表しがたいものである。サハリン，北海道，千島列島の歴史は，アイヌ，ニブヒ，ウイルタの歴史であり，また中国，満州，モンゴル，朝鮮，またオランダ，フランス，イギリス，およびアメリカの歴史の一部でもある。そして，もちろんなによりも，今では日本とロシアの歴史である。著者らは，共同プロジェクトとして，準備と同時編集の作業を含む，この地域の歴史に関する合作教科書づくりを提案する。この教科書では，旧石器人から現代人による北海道，サハリン，および千島列島の開発の歴史が記述されるであろう。

（この講演は 2000 年 1 月 20 日に高等教育開発研究部 2F 会議室で行われました。）

1. はじめに

極東地域では, ロシア人はもっとも「遅れてやってきた人たち」といえます。われわれの祖先は, オホーツクの海に17世紀に来ました。東部の全面的な開発は19世紀から始まりました。極東の歴史の専門的な研究は, やっと150年前に始まったばかりです。日本人は蝦夷地の開発を12世紀から始めましたが, さまざまな理由から私たちは歴史のその部分についてあまり知識がありません。

最近の北洋島嶼世界（注１）の歴史についての単行本や学校の教科書には, 多くの空白の部分や矛盾した説明が書かれていることを知るべきだと思います。ロシアと日本はすでに200年以上にわたって隣人同士でしたが, ロシアの歴史家も日本の歴史家も, この地域の真の歴史的環境について完全な理解にはいたっていないと考えます。私の見るところ, 北洋島嶼地域の歴史の研究が進まない主な原因は, 大部分政治的なものだと思います。私たちは, 授業で歴史を教える生徒や学生に対する責任を忘れてはいけません。今日, 私たちは未来に対して責任を負うとともに, その責任を本当にまた注意深く全うしなければならないと思います。

2. この論文の目的

この講演会では, 北洋島嶼地域に対するわれわれの関心をみなさんと共有したいと考えています。小論の目的は, サハリンと千島列島に住む人々の歴史と文化の分野における, 地域研究の現状と考えられる背景に光をあて評価することです。その評価と提案は, 北洋地域の地域史の科学的研究と教育に関する諸問題に関係しています。実際のところ, 歴史の問題は, ソビエト連邦共和国と日本の間の50年間のイデオロギー的な戦いの対象でした。そしてまずなによりも, サハリン, 千島および北海道の学校において地域史をどう教えるかという問題に関係しています。今度, 私たちは, 新しいサハリンの歴史学者グループによる新しいサハリン州の学校や高等教育機関における地域史の研究や教育に関する考え方を提起します。21世紀初頭における科学上の諸問題についてのさまざまな形の露日共同の解決案が得られるようになるでしょう。それに加えて, 国立サハリン総合大学（通称, サハリン大学）の歴史学者たちを代表して, 日本の共同研究者にいくつかの提案があります。それは日本の教育機関との国際協力の発展の背景に関係しています。

3. 19-20世紀のサハリンと千島列島の歴史学の発展に関する小論

サハリン州の歴史科学は, すでに少なくとも３つの段階を経ております。歴史情報の収集と基本的理解の段階は19世紀末から20世紀前半（1860年代―1950年代）に遡ります。この時期の特徴として, 主として民族誌学や考古学の分野に関係するロシアと日本歴史研究者がそれぞれ孤立して研究していました。この時期は, Ivan S. Polyakov, 松浦武四郎, Lev Ja. Shternberg , Bronislav O. Pilsudski, 鳥居龍蔵, 坪井正五郎, 清野謙次, 伊東信雄などの名前と結びつけられます。第２段階―20世紀の後半（1950-1985）―では, 島嶼世界の人々の文化と地域史の研究が, 適切な課題について多くの研究的文献および教育的文献の出版などで活気づきました。第二次大戦後のこの時期には, ソ連邦において, 日本において, そして世界のいたるところで, 歴史科学は特別な役割を果たしたので, 政府は自分の意志と必要に応じて歴史科学を支配し, 発展させました。一方では, この時期にソ連邦を含む世界のいたるところで等しく社会と科学のダイナミックな発展が起こり, その結果として, サハリン地区の地域史の発展が起こりました。サハリンの歴史科学の発展の第３段階は現在この時です。その発展は, わが国における共産政権の崩壊によって引き起こされたものです。その始まりは1980年代の中頃, すなわちソ連邦の改革（ペレストロイカ）の始まりの時期であり, 現在まで続いています。古いイデオロギー的業務（事前検閲を含む）の廃止, 図書館のあらゆる文献に対するアクセス手続きの簡素化, 外国の組織や研究者とのコミュニケーションの促進は, これまでサハリン州では無かった仕事の機会を生み出しました。ロシア領のサハリンや千島の歴史を研究する日本やその他の外国の研究者には, さらに多くの機会が生まれました。例えば, 1970年代のサハリンについて書いた２冊の本で非常に有名であったホノルル大学のJohn Stephan教授は, 自分の研究対象であるこの場所に立ち入ることを許されていませんでした。今や彼はサハリンの歴史研究者と非常に自由に接触し, 彼の本はサハリンでロシア語に

翻訳されて出版されています。

4. サハリン州の歴史を研究する機関

サハリン州の第二次大戦後の歴史や現状および展望は，サハリン大学，サハリン州郷土博物館，サハリン州の国立古文書舘，サハリン近代史文献センターなどの活動と結びついています。ペレストロイカ以前には，これらの組織の研究は，ソ連邦のアカデミーの長との継続的な協調とソ連共産党(CPSU)の地区委員会のイデオロギー的支配と圧力という枠組みの中でした。たとえば，1991年まで地域博物館の評議会の組織は，共産党のサハリン地区委員会の代表を含んでいなければなりませんでした。サハリン大学（当時は教育大学）の研究課題も同様にソ連共産党の大学支部と党の２つ地区委員会の２つの部局の支配下にありました。

今では，サハリンで歴史研究を行う組織は，ほぼ別のもっと独立性の高い位置にあります。これらの組織は，科学研究政策を自主的に決めることができます。1990年代のサハリン州の学問生活においては，アカデミーの影響力の不足が明らかに感じられるようになりました。この影響力の消失は，支配システムの脱中央集権化の過程とともに国中に起こっています。

4.1 国立サハリン総合大学（SakhSU）

国立サハリン総合大学は，1949年に師範学校として設立され，1954年に教育大学となり，1988年に大学になりました。最初に設立された学部の中に哲学部があり，教師になるための歴史，ロシア語，および文学を教育しました。それ以来，学部は何度も再編されました。今，歴史の専門家は歴史・社会・経営学部の歴史学科で養成されます。歴史分野の研究は，人類科学研究所の社会・経済地域センターの考古学，社会学，東洋学の各教室で行われている。また，サハリン大学の社会・政治講座，経済講座，教育学部やその他の部でも行われています。本学の全部で約30人（うち博士の学位を持つ者２名，PhDの学位を持つ者12名）が歴史，考古学，民族学，地域民俗学，経済学，社会学，サハリン地区の教育史の研究をしております。それぞれの部の主任は，M. S. Vysokov，A. A. Vasilevski，S. V. Prokopenko，G. V. Borovskoi，S. Ch. Lim，Tlekov S. S., Bok Zi Kouです。

歴史の研究成果はサハリン，ロシアおよび海外のさまざまな出版物として刊行されています。1999年の12月にはサハリン大学の出版会から新しい年報『サハリン大学学術年報』が出されました。

歴史研究は，基本的には地域政府あるいは中央政府から出される大学の科学研究費でまかなうことができます。しかし，実際問題として，研究費を受けることは非常に難しく，規則上，財政援助は不十分な予算から行われなくてはなりません。同時に，学部，研究室，研究グループ，および各研究者個人は，毎年しかるべき会合で研究活動の報告をしなければなりません。国は学術研究費を教師の給与として預けていると思われます。実際にその支払い額は非常に少なく，教師の学術研究のための国費は言うに足りるものではありません。しかし，それにもかかわらず，歴史分野の研究は続けられ，その成果は以前に比べて遜色がなく，1970年代に比べるとむしろ良くなっています。その理由は，創造における自由と歴史研究に対する学者の愛情のためです。資金不足のため中央の文書舘に何度も足を運ぶ機会を失い，サハリンの歴史学者は多くは地元の歴史や，地域の歴史的知見に張り付くようになりました。

大学の科学部は，科学分野の副総長E. Lisitsinaが指揮して，毎年学生会と教師会を開催していますが，そこでも「地域研究」のセクションは目立っています。地域研究に関するさまざまな課題は，他のセクションでも歓迎されています。大学の科学部では，特別研究「ロシアの歴史」が1990年代初期から行われています。約10名の大学院生が，A. M. Pashkov教授，L. S. Twarkovski教授，M. S. Vysokov教授の指導のもとに研究を行っています。このような基礎研究は，サハリン州の歴史とも結びついています。これに加えて，何人かは国内の他の高等教育機関――例えばモスクワ，サンクトペテルスブルク，ノボシビルスク，クラスノヤルスク等――の大学院で歴史研究を行っています。この分野の若い研究者の大きな問題はやはり研究資金の不足です。

4.2 サハリン州郷土博物館（SRLSM）

この研究博物館は1896年にアレキサンドロフスク-サハリンスキに設立され，後に豊原ーユジノサハリンスクの樺太道庁の博物館を引き継ぎました。現在では，学術的，文化的に非常に重要な施設となり，サハリン，千島地区の地域研究のセンターの一つになっています。そのスタッフは，収集，処理，多方面

にわたるサハリン州における学術情報の研究などを行っています。博物館では，歴史研究にPh.D.を含めて20人の人員を擁しています。そこには，地域史部，考古学研究室，民族学部，とサハリン州における彼のさまざまな事績の研究のためのブロニスラフ・ピルスツキ研究所があります。

これに加えて，博物館は地区の各地域センターに分室を有しており，そこでは各地の地域史が研究の基礎をなしています。サハリン州郷土博物館の主任および実行責任者は，V. M. Latyshev，T. I. Roon，V. D. Fedorchuk，V. O. Shubin，K. Ya. Cherpakova，O. A. Shubina，I. A. Samarin，M. M. Prokofiev等です。研究費は，サハリン州文化会議（サハリン州政府）といろいろな研究補助金，その他から得ています。1990年代に，サハリン州郷土博物館の歴史研究者は，中世の遺構の発見，ウイルタ（オロッコ）の伝統文化の研究，また船団の歴史などに最大の関心をはらいました。不幸なことに，1990年代に行われた千島列島におけるロシア人の植民についてのかなり幅の広い国際研究は中止されてしまいました。また，特に1989-1999年におけるサハリン州郷土博物館と北海道開拓記念館による両島における共同研究の進展は特筆に値します。

1994年から，サハリン州郷土博物館は，その年報である『サハリン州郷土博物館報』を刊行しはじめました。1994-1999年の間に６号の『館報』が刊行されました。この雑誌は，極東ロシアにおけるもっとも興味ある有用な出版物であると思います。1998年以来，サハリン州郷土博物館は，『ブロニスラフ・ピルスツキ研究所ニュース』も発行しています。今日まで，３号の『ニュース』が発行されました。サハリン州郷土博物館とその分室は，見学会，講演，学校会議，学術会議，休日授業，でも活躍しており，地域研究に関する情報はマス・メディアでも報じられています。

4.3 地域博物館と特別博物館

いくつかの市にある地域博物館の分室に加えて，地区の行政機関によって経営されている博物館や組織の博物館，すなわち会社や部局によって経営されている博物館があります。その中には，「サハリン州美術博物館」（サハリン文化会議）（館長M. I. Ishenko），「A. P. Chekhov『サハリン島』博物館」（館長 I. A. Tsupenkova），また漁業博物館，地質博物館，ティモフスク，コルサコフ，ウグレゴルスクの各市の博物館，およびオホーツク海博物館があります。さまざまなレベルで研究を行っている人は全部で７人であり，その中にはM. I. IshenkoというPh.D.を持つ研究者が一人ふくまれています。

4.4 サハリン州の州立文書館（サハリン州行政府）

この文書館は1938年に設立されたもので，サハリンと千島列島に関する19世紀と20世紀の歴史的文書のもっとも価値のある保管施設です。そのホールや図書館では，われわれの大学の学生，歴史研究者のみならずサハリン，ロシアの他の地域，および海外からの学術研究者がいつも研究しています。サハリンの文書館組織の歴史研究について語るとき，文書館館長のA. I. Kostanov，G. I. Dudarets，N. I. Vishnevski，V. L. Podpechnikov，N. I. Kolesnikovおよびその他の人たちのことは欠かせません。1994年に，サハリン国立文書館は年報『歴史文書』の刊行をはじめました。1995-1997年には２冊が刊行されました。

4.5 サハリン近代史文書資料作成センター

1991-1997年に，サハリン近代史文書資料作成センターは，サハリン州の文書サービスの文書部局のネットワーク下における独立研究施設として機能しました。このセンターは，1991年に共産党の文書組織を基盤に創立されたものです。その最初のセンター長は　M . S. Vysokovでした。この施設の歴史研究者の主な任務は，サハリンと千島列島の近代史に関する歴史的資料の研究と紹介でした。今ではこのセンターは，サハリン州の州立文書館の機構の中の部局となりました。

4.6 歴史研究者たち

20世紀の後半には，三世代の地域史および文化歴史研究者，考古学者，および民族誌的歴史研究者が存在しました。B. A. Zherebtsov，L. S. Gribanova，R. V. Kozireva（Chubarova）等は1940年代と1950年代の学者ですが，この人たちは第二次大戦後東部島嶼地域の住民の古代史と民族学をはじめました。スターリン政権下の条件ではそれほどのことはできませんでしたが，この時代のこの人たちの研究結果は後に出版されて，学術研究に多大の貢献をしました。

1950年代後半-1970年代の歴史研究者の世代は，数も多く，より成功しています。研究の多くは，ユジノサハリンスク教育大学（YSSPI）によって行われまし

た。特に，I. A. Senchenko, A. N. Ryzhkov, A. M. Lopachev（YSSPI）V. V. Vyazovskaya（SRLSM）などの人たちがそうです。1962年から1999年のあいだに，サハリン島の考古学者グループの始祖であるV. A. Golubevが教育大学で働きました。1970年代には，歴史学者のN. I. Kolesnikov，V. M. Latyshev，S. S. TlekovおよびA. M. Pashkov, 考古学者のV. O. Shubn, 経済学者で歴史学者のBok Zi Kouが学問の世界に参入し，現在に至っています。

1980年代と1990年代のサハリンの歴史学者の新しい世代は，1970年代にこれらの研究者のもとで勉強して卒業した人たちです。その中には, 考古学者のO. A. Shubina，N. V. Plotnikov， M. M. Prokofiev，S. V. Gorbunov，V. D. Fedorchuk，民族学者のM. I. Ishenko, T. I. Roon, 歴史学者のA. I. Kostanov，L. S. Twarkovski, S. Ch. Lim，I. A. Samarin， N. V. Vishnevski，S. P. Fedorchuk，A. A. Ipatievaとそれに筆者らが入ります。今では，サハリン大学の大学院とロシアの多くの高等教育機関を基盤として，若い研究者たちが歴史研究の世界に踏み入ろうとしています。

サハリンの学術研究の発展に対して，シベリアや極東ロシア出身の歴史学者によってなされた研究が多大な影響を与えています。アカデミー会員すなわちアカデミー研究所長のA．P．Okladnikov，A．I. Krushanov, A. P. DerevyankoまたR. S. Vasiljievski，Ch. M. Taksami，B. P. Polevoyはサハリン州で大変権威があります。新しい段階のはじめのこの時期に, ホノルル大学のJ. Stephanの著書『サハリン：その歴史』『千島列島：太平洋における露日のフロンティア』は，特別の価値を有しています。

4.7 歴史学者の学会

1970年代から80年代に地域史の学会は，かなりの程度ユジノサハリンスク教育大学の壁の中で行われ，また学術研究所，教育研究所およびソ連共産党の地方委員会の教育部会の支配下にあった"Znanie" 協会の指導のもとに開催されていました。時には国内のより大きなセンターから来た歴史学者も参加した歴史に関する発表会も行われました。1980年代以来, サハリン州郷土博物館は，２年に１回以上, 学術会議を開催するようになりました。この会議でサハリンの歴史学者は, 他の歴史学者達に研究の成果を伝え, 最近の諸問題について知識を共有し討論できるようになりました。サハリン博物館によって主催されたすべての学術会議の中で，B. O. Pilsudskiの生誕125周年を記念して行われた国際会議は特記すべき行事でした。

1990年代には，サハリン近代史文書資料作成センターは「極東におけるスラブ民族」(1993)，「A. P. チェーホフとサハリン」(1995)，「千島列島：歴史と現状と展望」(1997）のような興味深い会議を組織する端緒を作るなどの働きをしました。その準備と主催は, サハリン地区の行政府の文化会議が指導し, サハリン州郷土博物館とサハリン大学が協力しました。

1989年以来，サハリン大学とサハリン州郷土博物館は，毎年R. V. Kozyreva記念発表会を開催しています。この発表会で, サハリンの考古学者はそのシーズンの発掘成果を議論しています。1996年以来，サハリン州の歴史学者は, 歴史学者A. N. RyzhkovとA. M. Lopachevを記念して発表会を行っています。

5. サハリン州の歴史学の現状と21世紀の展望

現段階で，サハリン大学，サハリン州郷土博物館およびサハリン州立文書館の研究水準は相当高くなっています。1989年の段階で，独立の組織――サハリンおよび千島列島研究協会――があり，年度ごとの学術会議（国際会議を含む）は恒例となりました。ペレストロイカの環境の中で, ソ連共産党地方文書館を基礎にサハリン近代史文書資料作成センターが創立されました。現段階で特筆すべきことは, 1990年に最初の地域史専門誌 " Kraevedcheski Bulleten"（『郷土史研究年報：サハリン, 千島列島および近隣領地に関する諸問題』）の刊行が実現したことです。この雑誌の編集責任者にはM. S. Vysokovがなりました。この雑誌は,「サハリンおよび千島列島研究協会」, サハリン州郷土博物館およびサハリン文化財団が資金を提供しています。さらに, サハリン近代史文書資料作成センターとサハリン大学が財政支援のグループに加わりました。

以上をまとめると，サハリン州の歴史学の発展段階は次のように特徴づけることができます。

- 検閲の不在と学問創造の自由
- 歴史学者の協力の輪の拡大と自立した研究者の誕生
- 学問研究の課題の拡大
- 日本，アメリカ，ヨーロッパの学者との国際協力

の拡大
- サハリンおよび千島列島の歴史の新しい概念と新しい理解の構築のための作業
- 地方の出版界とマスメディアにおける歴史研究成果の広範な出版
- サハリン地区の地域史の分野における高い学術的アクティビティーに比べて資金獲得の機会が格段に少ないこと

私たちは，サハリンと千島列島の歴史研究に従事している研究者の輪が狭い範囲に局在していることはきわめて不利なことだと認識しています。島嶼地域の歴史に対する関心は，まず第一に学術研究の輪の中で成長します。しかし，ロシア科学アカデミーの極東（ウラジオストック）およびシベリア（ノボシビルスク）の学術研究所支部は，今やそれぞれの地域の研究者とのコミュニケーションを通して，その関心を島嶼研究に向けることをきめています。今日の財政事情では，これらの機関が，はるか遠方のロシア極東地域で大規模な計画を実行することはできません。それと同時に，アカデミー研究所との恒常的な計画のもとでの，サハリンの諸学術機関の（学問的：訳者注）興味は今でも存在しています。私たちは，歴史研究がこれ以上局地化すれば，その質の低下，地域主義者的傾向の成長，および地域史研究者による歴史の広い見方の喪失がもたらされると危惧しています。

近年，私たちは，外国の研究者，特に日本，アメリカおよびヨーロッパの研究者の異常に高い関心を意識しております。しかるに，サハリンと北海道の考古学者のみが共同研究を長期目標を持った国際プロジェクトまで高めることができたにすぎません。サハリンと北海道の大学間ならびに地域研究博物館が共同して進めている鈴谷－オホーツク文化問題に関する計画および中世における砦をともなう植民の研究がそれです。10年間にわたるかなりの努力の結果，20以上の発掘が行われ，その成果の一部はサハリンと北海道の双方で出版されました。

6. サハリンとクリル諸島の歴史の新しい概念と21世紀初頭の歴史研究の展望

1980-90年代に，サハリンの歴史学者の創造的な活動の盛り上がりの結果として，サハリンと千島列島の歴史について新しい考え方が現れました。そのような新しい考え方は，議論の余地のないものでした。ロシア社会では新しい思想のパラダイムが熟成され，列島の歴史における歴史的真実の歪曲に終止符を打つときが来たのです。この地域の考古学者，民族学者，歴史学者の刻苦勉励に加えて，本質的に新しい情報が多く集められました。それはもちろん，新しい考え方の枠組みで整理されています。前期，中期，後期旧石器および前期，中期，後期新石器の遺跡が発見され，新しい方法で研究されました。

サハリンの中世の問題も活発に議論されました。1990年代には，筆者の一人によって，北洋の島嶼世界の先史時代に関する新しい考え方が，多くの論文で，大学の授業で，さまざまな学会の講演で提起されました。サハリンの歴史研究の現段階で注目すべきことは，サハリンと千島列島の歴史に対する近代的な見方が発展したことでした。1994年に，この考え方は，M. S. Vysokovによって出版された「最も手短に述べたサハリンと千島列島の歴史」という本で発表されました。著者らは前期旧石器時代から現在に至る島嶼世界の前史および歴史の全期間をカバーする一般的な特徴についての概念を創造するためのあらゆる努力を結びつけました。

7. 新しい概念の本質

サハリンと日本列島の前期旧石器遺跡の始まりを起源として，この地域は数十万年にわたってもっとも古いタイプの人類が居住しかつ入れ替わった地球的規模の地域の一部として扱うべきです。この地域では人類の活動が，古代，中世および近代の社会の発展のさまざまな過程とさまざまな変化を引き起こしました。サハリンと千島列島は，過去の世界システムの一種の縁辺部として，全期間を通してその中の複合的な部分でした。サハリンと千島列島の歴史は，無文字（前史）時代と，文献によって光があてられる時代，すなわち，世界システムにおける中世史，新時代史および近代史の時代を含みます。

この過程において，島嶼の土地では異なる文化が内部であるいは外部から持ち込まれて発生し，花開き，衰退し，そして消滅していきました。数世紀の間に，多くの力強い文化集団が置き換わりました。そして（他の多くの民族と同様に）ロシア人は，わが島嶼地域における文化の葛藤と共生と変化の千年史において，決して最初の人たちではないし，また，確かに

最後の人たちでもないと思います。サハリンと千島列島は，それ自身として面白いだけではありません。歴史を通して，この島々は（全部または一部が）アジアとアメリカをつなぐ橋であり，大中華文明の未開な周辺部であり，モンゴル，満州，ロシア，日本の諸帝国にとっての僻遠の地でした。それ故，島嶼地域の歴史は世界史の文脈の中で，またアジアー太平洋地域の歴史の文脈の中で考察されるべきであります。

島嶼地域の歴史は複雑であり，きわめて一貫性がなく，またほとんど混乱しています。その第一の理由は，島嶼地域の歴史に関する資料が乏しいという事実により，研究が進んでいないと説明されます。第二に，サハリンも千島列島も，長い間ロシア帝国（とその後継者であるソ連邦），今ではロシアと日本の間のきびしい領土争いの対象であり今でもあり続けているためです。この関係で，ロシア（ソビエト）の研究者も日本の研究者も，島嶼地域の適切な研究の代わりに，多くは世紀の論争において自国の政府に味方するための議論を追い求めていました。

それ故，ソビエトの歴史学者は，かつてヨシフ・スターリンが彼らをしむけたように，「サハリンと千島列島は，最初に発見し最初に探検した権利により，また最初に開発し最初に利権を得た権利によりわが固有の領土である」ということを示す証拠を追い求めることに基本的な関心を払ったのです。この議論の円環に適合しないものはすべて無視され，すべて間違っていると宣言されました。このような研究の客観性について述べるのは難しいというのが自然でしょう。

古代から現代に至るサハリンと千島列島の歴史のための基礎的な研究は，今に至るも，存在しないと明記する必要があります。今やロシアの歴史学者は，サハリンと千島列島の歴史を新たに書き直す機会にめぐまれました。その歴史はどのような政治的な影響からも自由であり，民族的あるいは政治的価値ではなく人類普遍の高みに立って認識したことがらを基礎とするものになるでしょう。ロシアにおける共産主義の崩壊，（事前検閲を含む）古いイデオロギー的業務，地域の文献や図書へのアクセス手続きの簡素化，外国の研究者や機関とのコミュニケーションの発達により，このようなことが可能になりました。過去10年のあいだに，大量の実質的な情報がサハリンの歴史学者によって積み上げられ，新しい方法論的なアプローチが開発され，サハリンと千島列島の歴史的過去についての新しい概念が創造されました。島嶼世界の歴史についての普遍的な研究は，必要になっただけではなく，可能になったのです。私たちは，これから５年以内に，新しい概念にもとづいて，そのような研究がサハリン大学の歴史学者によって行われると考えています。この論文の著者たちは，将来の集大成である著書の組織者であり最初の参加者であります。

この計画の目的は，『日本海からオホーツク海に至る島嶼世界の古代から現在に至る歴史：サハリン，北海道，千島列島』とくロシア語・日本語の教科書の作成です。さらに興味がありさらに成功が間違いないことは，そのような教科書を日本の協力者とともに書くことです。このような関係で，私たちは日本の歴史学者と北海道大学の教育分野のエキスパートに対してこの場を借りて適切な提案を行いたいと思います。

この本をサハリン，北海道，および千島列島の客観的歴史にもとづいて書き始めるにあたってロシアと日本の歴史学者がまずしなければならないことは，この処女地の最初の開拓者とか最初の探検者などと言いたくなる心理を拒否することです。ロシアも日本も過去の世紀において，誰もいない島を編入したわけではありません。両国は，もともとの古代からの文化を有する人々によって占められていた島々を編入したのです。サハリン，千島列島および北海道の歴史は，単純にロシアと日本の植民地化の歴史に還元されるべきではありません。

それに加えて，それぞれに名付けられた島々の歴史は，数世紀にわたるこの２つの国の敵対関係によってのみ表現できるものではありません。サハリン，北海道および千島列島の歴史は，アイヌ，ニブフ，ウイルタの歴史であり，また中国人，満州人，朝鮮人，オランダ人，イギリス人およびアメリカ人の歴史の一部でもあります。そして，確かに，何よりも，それは日本とロシアの歴史の一部であります。

こういうことによって，私たちは何も上に述べたことから仮定の多い政治的結論を引き出そうと言うものではありません。私たちの学問的精神は歴史の脱政治主義・脱国家主義の原則にもとづいているのです。

このように言ってしまったのですから，サハリンと千島列島の歴史の内容は，概念的にその発展における人類の活動になります。

サハリンと千島列島の客観的な歴史についての成功した研究は，サハリンの歴史学者が外国の研究者や機関の研究と符号したかどうかで評価されるということは疑いのないところです。かくしてサハリンと北海道の関係, すなわちまず何よりも, サハリン大学と北海道大学の歴史学者との関係を，私たちにとってもっとも良い見通しの付け方とみなすことができます。歴史的に密接に結びついていたという問題に限定するかぎり, サハリン, 北海道および千島列島の歴史には多く共通するところがあります。そして, サハリンと千島列島の歴史は, 北海道の歴史を知ることなくしては理解できません。同じことが北海道の歴史についても言えるのであって，その歴史はこの島よりも北に横たわる島々の歴史と切り離して研究することはできません。以上述べたような関係で，サハリンと北海道の歴史学者によるこの計画を共同で実現することは非常に興味あることだと思います。この計画は, サハリン, 北海道および千島列島の歴史の露日の教科書をロシア語と日本語で共同で編集するという段階が含まれています。この本では，前期旧石器時代から今に至る北海道，サハリンおよび千島列島の歴史が記述されることになるでしょう。

以上に提案したアプローチは，歴史を外交官や政治家の現今の必要性や要求に応じるための道具に変えてしまうことを防ぐことができます。反対に, その沿岸で私たちが生まれたふる里のオホーツク海および日本海の島々の歴史を，より良く理解するためのより一般的なアプローチや原則を見出すことができるでしょう。

提案したプロジェクトを実現させることは，若い世代の教育にとっても大きな価値があります。サハリン地区や北海道の学校の生徒や学生は，北洋の歴史について客観的に正しく普遍的な情報に接する機会に恵まれることになりましょう。そこで，北海道, サハリンおよび千島列島の歴史の主要な内容は，中国人, 日本人, オランダ人, あるいはロシア人のうちの誰が最初にサハリンや千島列島に足を踏み入れたかという問題ではなく，10万年も前のいつどのようにして，人類によるこれらの土地の開発が始まったかというところにあることが分かるでしょう。

8. 結論

政治的およびイデオロギー的圧力の消滅と近年における日本とロシアの歴史学者, 考古学者, 民族学者の親しい関係は，双方に確かな利益をもたらすことになるでしょう。すでに述べた方向でブレークスルーを生じさせることになると思われる既知のあるいは未知の歴史的資源の，公平な評価や説明が可能になるでしょう。この地域での国際的学術的な接触は, 私たちを新しい段階へと導くことができます。そこでは以前の密接した課題に加えて長期の目標と複雑な共同研究プログラムが生み出され実行されるでしょう。歴史的課題の決着のために少なからざる重要性を持つ役割を，近代的な方法論的および組織的手段の発達が果たすことになるでしょう。これらすべてのことは, 新しい世紀の最初の10年間のうちに, 少なくともわれわれに東アジアおよび北アジアの島嶼世界の歴史的過去に対する本質的に新しくより真実に近い見方と考え方をもたらすことになりましょう。

私たちが考えていることをすべて要約すれば，サハリンと北海道の歴史学者の新しい方向に沿った戦略的な目的をうちだしたということです。すなわち，学問研究の分野における競争的かつライバル的関係から，未来の世代の利益のために公正な協調と相互扶助の関係への転換をはかります。この目的のためには，歴史をあらゆる政治から切り離し，イデオロギー的精神ではなく学問の共同体と学問への忠誠というアカデミックな精神に結びつけることが必要だと考えます。このことは，成長しつつあるサハリン, 北海道および千島列島の生徒や学生に歴史を教える分野では特に重要です。これらすべてのことは, 新しい世代を育てることを助けることになり，そうして育った世代は，ロシアと日本の間の領土問題をいかなるショックも与えず解決し，永遠の世界と２つの国の友好を確立することができるでしょう。

9. 申し入れ：サハリン大学の歴史・社会・経営学部からの北海道大学とのコミュニケーションに関する申し入れ

１）オホーツク海と日本海の島嶼世界に関する教科書の共同執筆のための共同執筆部会の創造に関する申し入れ

上に述べたプロジェクトの実現のためには，サハリン大学の歴史･社会･経営学部と北海道大学の歴史学者のグループとの間で，教科書作成さらにはサハ

リン，北海道および千島列島の島嶼世界の歴史に関する露日共同作業による本の編纂について協定を結ぶ必要があると私たちは結論します。共同執筆部会には双方から２および３名が参加できるようにします。この論文の執筆者は，上の本を作るための作業部会に参加する準備があります。日本側から同様の希望者が出た場合は，１年以内にチームを作ることができると思います。その第２段階は，ワーキンググループの会合をサハリンと北海道の双方で開いて，この本の執筆に関する基本的な原則と計画について相互調整についての日本側からの提案を検討することです。その次の執筆，出版，および配布にいたる段階については将来の適切な時期に調整します。

２）日本の研究者および大学院生をサハリン国立大学で研修するための組織に関するロシア側からの提案

サハリンにおける歴史研究のもっとも将来性のある方向の一つは，サハリン州の領土に住む人々の研究および，ロシアにおける近代的な民族間関係です。今ではサハリンと千島列島には100以上の異なる民族が住んでいるので，これは特に重要な問題です。サハリン大学の歴史・社会および経営学部は，サハリンの原住民やロシア全土における民族間関係の近代人口統計学的現状や問題に関心を持っている日本人の研究者を支援する用意があります。それを実現するために，大学院生の組織化とサハリンにおける外国人研究者の短期研修の実現を計画しています。このプロジェクトの第２段階の発展に続いて，考古学者の研修がサハリン大学の人類研究所の考古学研究室と同歴史学研究所の歴史学科において始まるものと思います。

この研究の間，外国人研究者は，（特別講義を聞くことによって）理論的な知識を得ることができ，また実質上サハリンのあらゆる場所においてさまざまな民族の中に入って個別に研究することができます。研修を受ける人は，サハリンにおける最高の専門家から助言と援助を受ける機会が得られるでしょう。サハリン国立大学の歴史・社会・経営学部における研究と研修の期間は，１カ月から１年です。

（小笠原正明訳）